

6 子牛の下痢対策を契機とした大規模肉用牛農場の衛生管理改革

上北地域県民局地域農林水産部十和田家畜保健衛生所

○小田桐千鶴恵 太田智恵子

近年、肉用牛の飼養戸数が減少する一方、1戸当たりの飼養頭数は増加傾向。当該農場は管内に系列6農場計1,300頭を飼養する肥育農場であったが、繁殖複合経営へ転換し、平成28年3月から県内外の妊娠牛を約200頭導入。導入時の衛生対策について当所に相談があり、ヨーネ病や牛白血病検査を実施。経営転換にあたり1農場を新設、3農場を改築。分娩舎、子牛用ハッチ舎を増築したが、平成28年11月から子牛の死亡事故が相次ぎ、平成29年2月、発熱、血便を呈して死亡した子牛2頭を牛サルモネラ症と診断。同居する母牛及び子牛の保菌状況検査を行うと共に牛舎や器具の徹底消毒、抗生剤による治療を指導。これをきっかけに疾病の農場内及び農場間の拡大防止のための牛群担当者の区別、踏込消毒槽、専用長靴を設置。また子牛の免疫を均一化するため初乳製剤給与及び親牛へのサルモネラワクチン接種を指導。繁殖ステージごとの牛舎移動の流れやカウハッチの整備が進み農場従業員の衛生意識も向上。細菌検査は飼養牛延べ374頭及び環境55か所で実施し、平成29年7月以降菌分離されず清浄化を達成。現在は飼養管理に対する意識も向上し、育成牛の尿石症や繁殖牛の低Ca・低Mg血症対策を含め代謝プロファイル検査を実施。今後も企業系参入等により農場の大規模な経営転換が見込まれ、飼養管理失宜や疾病発生時には地域に与える影響と損失が懸念されるため、飼養形態の変化に対応した検査・指導が必要。